5／3「主が教えた私たちの祈り」マタイの福音書6章9-15節

小池 宏明 牧師

先週から教会学校の教案誌「成長」の聖書箇所に沿って御ことばを取り次いでいる。約3年間で旧約と新約聖書全体から語ることになる。今回のテーマは「主の祈り」で、「天にいます私たちの父よ」という「呼びかけ」と、以前の訳とは大きく変わった「主の御名が聖なるものとされますように」という箇所を取り上げる。

（1）天にいます私たちの父よ

「**天にいます私たちの父よ**」という呼びかけは、私たちが対話する相手がどこの誰なのか、明らかにしている。私たちは、いつも地上のことばかりに関わって、下ばかり見て生きているのではないか？しかし「天にいます」と祈る時、自分の置かれている現実から、自分を引き離して、心を天に向ける。誰に祈るのか？「**私たちの父よ**」と呼ぶ。「私たち」とはどのような範囲か？今集まって（画面の前で）共に祈っている私たちのことを指している、と理解できる。一方で、マタイの福音書では「山上の説教」の中で、この祈りが教えられた。「敵を愛し、迫害する者のために祈れ」と教えられたことから私の敵を含めた「私たち」なのだ。父なる神様は「敵」を排除しない。呼びかけの最後は「**父よ**」。人間の父と母(親)と、天にいます父なる神様とは、全く違う。イエス様が、真の神の子として「父よ」と呼んでいる。主は御自分が「父」に呼びかけているように、私たちもイエス様と同じように呼びかけてよい、と許可を与えて下さった。

どんな時にも、どんなことが起こっていても、天上には「愛を貫く父なるお方」がおられる。このお方に、父なる神様に全き信頼をおいて、主の御名を呼び求めよう！

（2）御名が聖なるものとされますように

神様の栄光を求める祈りの最初、「**御名が聖なるものとされますように。**」（新改訳2017）について。父なる神様は、もともと「聖なるお方」なのに「聖なるものとされる」必要があるだろうか？いつの時代でも、どんな所でも、すべての人々から汚され続けている「聖なるもの」の現実を思う。それなのに、主イエス様は私たちに、聖なるものとしてあがめられるように、祈り求めることを許された。主は、私たちを、私たちの祈りを、必要として下さっている。こんな者をも主は必要として、私たちによって「聖なるものとされる」ことを望んでおられる。

まことに、汚れた世界、汚れた私たちであるが、天に心を向けて、主の御名が、主ご自身が、いつも聖なるものとされる、聖なるものとしてあがめられる、そんな私たち(教会)でありたい。

（3）主の御名があがめられる教会を目指して

教会がまことに、主イエス・キリストを頭として立て上げられるためには、何よりも主なる神様（父、子、聖霊）が聖なるものとされることが大切。いつでも、どんな状況にあっても、主の御名があがめられる教会となることが必要。そのために、時間を聖別して、場所を聖別して、御前に出て祈る、礼拝を捧げる生き方を選ぶ。ただ、唱える主の祈りではなくて、祈ったように変えられる私たちになると決意して、常に天にいます私たちの父の聖なるお名前があがめられる教会を立て上げていきたい。